

急ぎ宿営に帰って玉音を聞きました。それが終戦の詔勅だったのです。

砲は海に捨てよとの命により、海に突き出た棧橋を作り海に捨てる計画だったが、その寸前になって「待った」がかり、砲は完全な姿で米軍に引き渡すことになりました。

兵員の武装解除は兵器を返納しただけで何もなかったですね。拳銃は官給、私物を問わず返納したが軍刀については何の指示もなかったので、そのまま持ち帰りました。兵は毛布を持てるだけ持って帰郷した。全般的に渥美半島方面の武装解除は寛大であったようですね。

これからどうなるのだろうかと質問を投げかけてみたら皆「判らん」ということでした。民主主義の国になるんだと言ったので民主主義とは一体何なのだと聞えば「国民主体の政治が行われるのさ」という返事でした。

民主主義は金と時間がかかるという話も出ましたね。国民主体なら大部分の国民が戦争しようと言え

戦争をするのか、と反問したが答えは返って来ませんでしたね。

幸運の武兵团第九師団（沖縄、台湾）

湾

石川県 蕪城 直勝

―第九師団は、満州、沖縄、台湾と転戦し、結果的には幸運無傷の兵团といわれますが、蕪城さんには何年徴集ですか。

私は大正九年生れ、昭和十五年徴集兵、同十六年一月現役兵として、敦賀の歩兵第十九連隊補充隊へ入営です。一週間で満州でしたが、南方はおろか、台湾、本土も危ないというので、在満の主力師団は続々と南下していったのです。

しかし、満州での厳しい訓練は忘れることが出来ません。ご承知のように、第九師団（武兵团）は、金沢の歩兵第七連隊、私の入った敦賀の第十九連隊、富山

の三十五連隊と特科隊で編成されていました。

師団の森林演習は「シ号演習」といって、牡丹江から十日間も森林の中を踏破し、最短距離で国境へ出るという、無理に直通したのが、第九師団長の原閣下でした。

私は教育は全部満州で受けたのです。一期は三月頃で、三年間いたわけです。満州での戦闘はほとんど無く、国境では老黒山が第一線で、富山の第三十五連隊が、山砲の一部といっしょに守っていました。第七連隊は掖河、第十九連隊は穆稜です。

私は満州では師団司令部で暗号教育は一期検閲後で特別に受けました。それからは参謀部で、電報の翻訳が任務でした。

ーすると、国境警備というより、参謀部専属ということですか。また、沖縄での作業について。

ほとんど師団司令部ですね。満州、沖縄、台湾、敗戦、復員の間、丸五カ年間戦闘せず、訓練と陣地構築、私は暗号、司令部勤務というわけです。

師団は昭和十九年六月、南方行きです。とに角、我

々は、第九師団は最強師団と自負していましたし、兵力は甲編成で二万人ぐらいだったと思います。釜山から玄界灘を渡って鹿児島へ、何処へ行くか判らなかつたが、暑い盛りだった。当時はもう、制空権も制海権も連合軍が握っていて、ジグザグ航行で、護衛は海軍が少しいただけだったと思います。

沖縄へ着いたら、住民から盛んに歓迎されて感激しました。寒い北の満州から沖縄ですから随分気候が変わるし、大陸から群島で、何か明るい気持ちでした。しかし、いよいよ米軍相手の戦闘かと、引き締まる気持ちでもありました。

まず、陣地構築です。水際防御、洞窟作業は山をくり抜く、洞窟の中に陣地を作る。敵上陸に備え、水際に射程をつけた。敵が上陸するまで空爆受けても関係ないように。イモをかじりながら、裸でトンネル掘りの作業を続けた。沖縄での主食はほとんどイモだった。伊江島の飛行場の建設は一ヵ月かかった。とにかく、大きな飛行場を短期間に作るのですから、ほとんどが人力、手作業だから、モッコ担ぎだ。工兵一個連隊が

主力だったが、敦賀の第十九連隊の人達もいた。師団通信から、一個分隊配属、私も暗号班として、本島と伊江島間の連絡のため幕舎生活をしていたが、直接労働にはタッチはしなかった。

―伊江島のことですが、私も基金の資料収集委員として訪問したことがあるのですが、本部港から見る帽子型の山のある島という印象があります。その時「わびあいの里」で、米軍との戦いで随分民間人の犠牲があったと説明を受けました。

―軍官民の人々が、島から逃げる事が出来ず、親が子を殺すという悲劇が多くあった。しかも、せっかく造った大飛行場は自らの手で破壊したという。あの島に沖縄の縮図を見た感じですが、蕪城さんも感無量でしょう。

伊江島から本島へは何時頃帰ったのですか。

工兵連隊は大きな船で引き揚げた。私が渡る前、十月十日の大空襲は早朝からでした。海軍の艦艇はグラマン機によって波状攻撃でやられた。海軍は八の字を書いたように逃げる。対空射撃で随分抵抗していた。

しかし、艦船は飛行機には弱い。対空射撃もなかなか当たらない。まあ、やられっぱなしで、切歯扼腕しながら可哀想な感じ、悲惨な状態でした。

〔記録によると、「早朝より、米軍艦載機による大空襲が行われ、その機数延五〇〇機に及んだ。そのため、那覇市は完膚なきまでに灰燼に帰し、読谷（ヨミタン）、嘉手納、両飛行場及びその他軍施設も相当被害を受けた」とあるので、狭い沖縄で本島各地を徹底的に叩いた。それが今の蕪城さんのお話の裏付けである。〕

私達が部隊（第九師団司令部）に帰る途中、山の中间に一個分隊連れ、野宿していた時、そこで見ていた。当時、もう沖縄は、民間の人々を召集したり、学生も挺身隊となり、女学生は補助看護婦となって軍に協力していた。弾も、食糧その他の資材の補給は無理となりつつあり、攻めて来るだろう連合軍の補給は充分でしょう。

沖縄というか、もつと大きくいうと南西諸島の軍は第三十二軍で、台湾にある第十方面軍の隷下にあった

わけです。第九師団が沖縄に配備された時、本島には、我が師団を中心として、第二十四師団（山）、第六十二師団（石）の三個団と、一独立混成旅団が主力となっていました。

第九師団は沖縄の中核として、首里、糸満に主陣地を構えていて、摩文仁の丘などにもいた。ある時、十一月だと思うのですが、軍司令部は那覇の女学校でしたか、軍司令官は牛島満中将、長勇参謀長でした。第九師団は首里の師範学校にあって、師団長原守中将、参謀もおられました。偉い人、最高幹部が一緒にいた時です。

私は師団司令部の暗号担当でしたので、その時の様子を窺い知ることが出来たのです。参謀本部から電報で「最強師団を抽出して台湾に移駐させよ」という内容だったと思います。第三十二軍では、「一兵も出さぬ、沖縄を見捨てるのか。（参謀が卓を叩いていた）」という強い返電だったと記憶しています。軍と参謀本部だけが第十方面軍（台湾軍）との電報の応酬だったか、結局は参謀本部の命令に従わなければならなかった。そ

の時、我々の原師団長閣下も同席されていたと思います。

抽出師団は第三十二軍に委ねられ、結果は第九師団が行くことに決定したのです。師団は満州からそのまま無瑕、完全装備、現役三、四年兵主体の「虎の子師団」だった。その間の空気は下部には全然知らされなかった。私は暗号翻訳が任務だったから、その間の事情を知ったわけです。

満州から沖縄の時もそうでした。上陸せず幾日も船の中で待機していた。部隊の幹部でも判らない、参謀でも良く判らなかつたらしい。鹿児島で滞留中に沖縄と判った。

【解説】

昭和十九年になると、南方各戦線への兵力転用が盛んに行われ、特にフィリピンのレイテ戦が天王山といわれていて、満州から第一師団はじめ数個師団が、また、満州から台湾に移駐した第十師団が、十一月二十日にフィロピンに転用、第二十三師団も北満からフィロピンに移駐をした。（十月二十三日、

台湾軍第十方面軍隷下編入が発令されていた)。

このように台湾の防備用師団がフィリピン転用、そのため本土上陸の前に危険視された台湾が手薄になった経緯がある。そのため、十一月二十三日、大本営陸軍部服部卓四郎作戦課長は、台湾台北に第三十二軍参謀八原大佐を招致して、第十方面軍(台湾軍)幕僚とともに第三十二軍から一兵団抽出に関する会議を開いている。そして、十一月十三日、第九師団の台湾転用を内定している。従って蕪城さんの述べた、師団抽出に関する大本営との応酬を裏付けている。

「いよいよ沖縄から台湾転出ですが、昭和十九年内に出発したのですか。沖縄、台湾間の航路は危険極まりない状態だったと思いますが、犠牲はどうでしたか。

台湾へ移動とは始めは判らず、「フィリピン」かという噂もあったが、十二月二十八日頃出帆したと記憶します。目的の港は基隆でした。半分やられると覚悟していたが一兵も損せず、一艦、一船もやられずで、

途中警報はあったが、空襲も、雷撃もなく、唯々幸運の一言です。

上陸して新竹へ行き陣地構築した。師団司令部は新竹の中学校だったが、戦闘司令部は八紘台と師団長が命名した山の中へ入った。

司令部付近には綺麗な竹が多く、それを割って山の中で兵舎を作った。陣地は、参謀部、副官部、電報班もみな横穴式のものであった。はじめ司令部は先に申した通り、新竹の十八仙山という所の中学校だったが、空襲を受けたら松山は禿山になってしまった。台湾への連合軍上陸は無かったが、戦後の戦友会で師団参謀は、「武運に恵まれた」と感激していた。なにしろ師団はほとんど無傷だった上に、沖縄逆上陸の話も実施せずだったということだ。

「終戦の情報は無線、暗号だったから早くキャッチしたのではないですか。また戦後の状態は如何でしたか。

「ポツダム宣言受諾用意あり云々」の機密電報が入ったのは八月十日頃だったと思います。しかし「ポツ

ダム宣言とは何か」が判らなかつた。その前、受信する南方からの電報は、戦勝ではなく、負けている悲惨な情報だったので、大本営の発表とは全然違つたものだということを知つていた。

電報は、下部や兵隊には知らせない。暗号班が翻訳、解読したものは、そのまま幕僚部へ行くから一般には判らない。だから兵隊にとっては、海の向う側の沖縄玉砕の情報も耳に入っているから、旗色が悪くなつていと推測は出来ても、まさか敗戦、無条件降伏とは考えてもみない、大ショックだつたわけです。

連合軍で上陸して来たのは米軍ではなく、後になつて中国軍だつた。その姿は、銃を天秤のように担いで、菅笠を背負つている。こんなのに負けたのかと思つた。我々の収容所も米軍ではなく中国軍が管理した。

終戦後、「四年程帰れぬ」というので、部隊は自活のため分散した。私は山へ登り、米を持っていつて畑を耕した。兵舎は自分たちで作り、米、味噌、缶詰は部隊から貰つていた。

中国軍は、我々を非常に自由に生活させてくれた。

私は部下三〇人ぐらいと一緒にだつた。三ヵ月もしたら急に帰れるということになつたと、司令部から命令が出て「現地を始末して来い」という。四年ぐらいは帰れぬと思つていたので、米などを現地人に分け与えて帰つた。現地人は日本人に好意を持つてくれていたので、生活しやすかつた。

我々の俘虜生活（抑留）は基隆港埠頭の倉庫にいた期間だけだつた。その間は砂糖倉庫の使役で、監視は中国兵だつた。

帰国が決まつたのは昭和二十一年一月一日だつた。正月の無言の万歳だつた。東方、宮城を遙拝し、声なく、お互いに肩を組んで無言で泣いた。復員船は碎氷船「宗谷」だつた。一月十七日鹿児島港で復員完結し、家に帰り着いたのは一月二十日で、奇しくも父の命日であつた。

想えば、我々が台湾へ移駐してから四ヵ月後、米軍は、座間味、嘉手納海岸に、抵抗も無く上陸した。まさに昭和二十年四月一日のエイプリルフルである。兵力は第七、九六師団と、第一、第六海兵師団であつ

たという。伊江島へは四月十六日上陸、二十一日夕刻までに全島占領。守備隊長小川少佐以下は城山山頂で玉碎した。米新聞記者アーニー・パイルは十八日に戦死した。これを記念し、戦後、東京有楽町にアーニー・パイル劇場があったことを記憶する人も少なくなっているでしょう。

五月二十三日夜、牛島軍司令官は、師団長会議で、首里複廓陣地をもって主力の最後とすべきかどうか、慎重に討議の結果、南部喜屋武―摩文仁地区に後退することに決し、新たに各部隊の部署を決めた。首里戦線後退時の傷病者は約一万人と推定された。

六月二十三日、摩文仁の丘で牛島軍司令官、長参謀長は自決し、米軍上陸以来八十余日にして、沖繩玉碎、戦いは終結の形をとった。第六十二師団長は六月二十二日、第二十四師団長は六月三十日それぞれ自決した。米軍が沖繩占領を布告したのは七月二十二日である。

玉碎後、沖繩各地、特に北部国頭地区においては、ゲリラ戦が続けられ、米軍掃討戦で生き残った幾多の集団があったことは忘れられている。

沖繩戦の悲惨さは官、民を巻き込んだ戦闘であったことである。防衛召集を受けた青年男子はもとより、男子学徒一、二九六名中、戦没八五一名。女子学徒五四三名中、戦没二六三名。その他一般義勇隊は食糧供出、運搬その他作戦に側面的に協力した。

なお、第九師団の台湾移駐後の日本軍兵力概数は陸軍一〇万五、〇〇〇人（第三十二軍司令部直轄部隊、第五砲兵团司令部、第二十四師団、第六十二師団、第四四旅団、第十一船舶団司令部）。海軍約五、〇〇〇人（沖繩方面根拠地隊）。合計十一万人である。

米軍兵力概数は艦船約一万五〇〇隻、海兵隊三個師団、陸軍六個師団、空軍五〇〇機。合計約十八万三、〇〇〇人である。

損害。（戦死）日本側、軍人軍属約九万人、一般住民死亡約九万二、〇〇〇人（内戦闘協力者五万人余）。

米軍側戦死一万二、五〇〇人。

もし、第九師団が沖繩戦の主力戦力となっていたことを想定すると、米軍に対し多大の損害をあたえたであろうし、無抵抗で、米四個師団を嘉手納海岸に上陸

させず、沖縄戦の様相は相当変化を来たしたことでしよう。

また、沖縄玉砕の時期は終戦間際まで延引出来たろうし、あるいは終戦までも……。と憶測するむきもあらう。その反面、第九師団玉砕の悲劇や官民のさらなる犠牲も予想される。仮説の上の推測は別として、幸運の第九師団の編成は次の通りである。

第九師団 金沢編成 終戦時駐地 台湾新竹。

歩兵第七連隊（金沢） 武一五二四部隊、

歩兵第十九連隊（敦賀） 武一五二八、

歩兵第三十五連隊（富山） 武一五三三、

山砲兵第九連隊 武一五四六、

工兵第九連隊 武一五五九、

輜重兵第九連隊 武一五六四、

第九師団通信隊 武一五六〇、

同兵器勤務隊 武一五六八、

同第一野戦病院 一五八二、同第二野戦病院 一五九五、同第四野戦病院 一五九五、同制毒隊 一五三七

部隊

千島・松輪島戦記

福島県

加藤 玖市

―軍隊入隊時の御家族の状況はどのようでした。

若宮村字大江に住み父母と妹六人と妻（令状が来て結婚）の十人家族でした。

―入隊は何時で、何部隊でしたか。

昭和十七年七月末日に召集令状が来て、補充兵として、若松第二十九連隊に八月一日入隊致しました。親類・友人・近所の人達から盛大に見送られました。

―奥さんには、どのように言って、出征されましたか。

妻には「留守を宜敷く頼む」と言い、「体に気をつけて頑張つて呉れ」と申しました。

―入隊直後の教育・生活はどうでしたか。

当初一カ月は歩兵科の教育で、一カ月で検閲を受けるといふので非常に厳しかったと思います。私の召集